
たまゆら堂

Uサコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たまゆら堂

【Nコード】

N4585I

【作者名】

Uサコ

【あらすじ】

歴史のほんのひと息。人生のたまゆらを切り取った短編小説集。日本史・中国史を中心に、フィクション・神話なども交えています。お品書き：孟浩然（盛唐） 吉良義周（忠臣蔵） 上杉景勝・景虎（戦国） 袁紹（三国志） 子貢（春秋戦国） 姫急・寿（春秋戦国） 主冕（元）

春暁（孟浩然）

私が世に出ることはないのだ。

日が高くなつてから起きる朝は、いつもそうおもつ。雀の音がする。鶯うぐいすの音がする。春風の吹く日はなおさらだ。

孟浩然もうこうねんは、寝台からおりた。履き物をつっかけるのも億劫で、床石の上を素足で歩いた。風にたわんだ窓を開ける。庭一面の牡丹。白い花、赤い花、紫の花が、飄飄ひょうひょうと風にひるがえっている。

あの日の長安も同じだった。絹を束ねたような花弁が、はらはらと風に揺れていた。その中を、何度目かの科挙に落ちた浩然是、虚しく歩いていた。抜けるような青空を見上げる。すぐ横を、花見の人人が楽しげに過ぎっていった。鮮やかに開いた桃の下では、白い袍を着た男たちが談笑している。あまりに楽しげなので耳を傾けてみると、彼らは、どの庭で牡丹を見物しようかと話しあっているのだった。

科挙は、倍率何千という狭き門だ。その熾烈な競り合いを勝ち抜いた者たちには、長安中の庭ならばどこへでも立ち入ってよいという特権が、その春に限り与えられる。

白袍の彼らは、貴族の庭で繚乱たる牡丹を眺めつつ、これから始まる官僚生活に胸を弾ませることだろう。

耳を塞ぐようにして、浩然是その場を去った。桃が散っている。

石畳で踏みにじられた花弁。いたたまれなくなって目を上げた。満開の牡丹が、青い空の下で白骨のように寒寒としている。

浩然是窓から離れた。

八年前のことであるのに、落第の記憶は、昨日のこのように浩然を苦しめる。忘れたいことほど忘れられぬものであると、つくづくおもつ。

あのととき、牡丹を見物する側にまわっていたとしたら、こうして

寝台の中で夜明けを迎えることもなかった。官僚の朝は早い。日の出とともに出仕する。まだ寒い春の夜明け前、官人たちは手のひらをこすり合わせながら、宮殿の開門を待つ。あの春に桃の下で見た白袍の彼らも、今朝はきつとそうしたにちがいない。そして、いままさにこのとき、国のために筆をとり、弁舌をふるっているのだらう。

風がぬるい。乱れた髪には白いものがまじり始めていた。四十半ばを過ぎて惰眠をむさぼる身であるうとは、秀才でならした若き日の自分は、おもいもしなかった。いまさらながらに愕然とする。月日は、どれほど無駄に散ったのか。

鳥の音がする。牡丹が咲いている。

春眠 暁を覚えず

(春の眠りはとろとろとして夜が明けたことも分からぬほどだ)
处处 啼鳥を聞く

(あちこちで鳥のさえずりがする)

夜来 風雨の声

(ゆづべ聞こえた雨風の音)

花落つること 知んぬ 多少ぞ

(いったいどれほどの花が散ったのだろう)

臨終（吉良義周）

踏み出した足が、ずるりと滑った。寝巻きを端折って丸出しになった尻が、地面に叩きつけられる。ぬかるみに向かって、義周は舌よしちか打ちをした。

母屋の方で、また絶叫がほとばしった。猫を踏み殺したような声。しゃがれたそれはどこか甘さを含んでおり、感喜しているようにも聞こえた。

義父は無事だろうか。跳ね起きた義周の目には、普段と変わらぬ庭が映った。ほんの半寸だけ満ち足りない月を、満庭の雪が照り返し、寒寒とした青さを見せている。雲はない。人影もない。頭に雪をのせた庭灯籠が、かしら包みにした坊主のように突っ立っているばかりだ。

母屋の回り縁へ武装した男が現れた。下駄を脱ぎ捨て、義周は馳せ寄った。素足が、激しく雪を揉みたてる。赤穂の犬め。抜き放った大刀を振りかぶると、磨きこんだ峰に明光が冴えた。死ね。

背中に灼熱が走った。
なにが起こったのだ。大喝しようとした口の中へ、雪がなだれ込んでくる。義周は、前のめりに倒れこんでいた。耳元を武者草鞋が駆けていく。身を擦ると、右の肩甲骨が地獄のように痛んだ。手足は冷たい。濡れた尻も冷たい。視界いっぱい広がった雪は余すところなく踏み荒らされて、荒野のようだ。

寒い。本当に寒い。

寒いな、とおもった。

雨戸は古くて立て付けが悪く、締め切っただけでも隙間風が辛い。義周は雨戸へ這い寄った。破れ目から庭を見る。木木がまっ白な雪に覆われて、うっそりとわだかまっていた。雀が一羽、小さな足跡

を残しつつ跳ね回っている。青い空の下の庭は、義周には静か過ぎるようにおもわれた。

四年前の襲撃は、はなはだ理不尽なものだった。

きっかけは、江戸城内の松の廊下で、赤穂藩藩主・浅野内匠頭長矩あさのたくみのかみながが、義周の養父・吉良上野介義央きんじょうすけのすけよしひさに斬りつけた事件だった。その罪により、浅野は切腹。赤穂藩は取り潰しとなった。

一方の義央は、なんの咎めも受けなかった。斬りつけられても反撃をしなかったことに加え、下手人である浅野の動機が不明であったためだ。

事件は、その一年半後に起こった。遺恨を含んだ赤穂藩残党により、吉良邸は襲撃を受けたのだ。

義父は惨殺された。生き残った義周は、幕府から「不屈きである」と言い渡され、信州・諏訪すわへ流された。ここ高島城で幽閉の身となつて、じき三年になる。

義周は寢床へ戻ることにした。腹這いのまま、氷のごとく冷えた板敷きを這う。火鉢はない。藁布団は三年前から敷きっぱなしだ。横になると、湿気のコもった敷布は、霜が降りているかのように肌を刺した。

寒い。全身に震えがきて、やけに頭が冴えた。それなのに、なにも考えるべきことがなかった。おもい出すことはできる。だが、頭をめぐるすべては妙に他人事めいていて、自分の身に起こったことだとは到底おもえなかった。そんな遠い出来事に対してあれこれと考えることは、無駄のように義周にはおもえる。三月ほど前に寝たきりになってからは、ずっとこんな調子だった。

雨戸がほとほと叩かれた。いらえもせぬうちに、膳を持った手が又ウと突き出される。なにも言わず去ろうとした男に、義周は声をかけた。

「火鉢を、もらえぬだろうか」

あたたまれば、少しはまともになれるとおもつ。

世話の男は、またか、という調子で投げやりに答えた。

「火事を出してそこもとになにかござれば、我が藩はお上に申しわけが立たぬ。ゆえに火の気は厳禁とするよし了解されよと、毎度もうしておるであらう」

義周は、ほつれの目立つ襟をかき合わせた。足が冷え切って刺すように痛み始めた。

「ならば、せめて綿入れを一枚」

「それも以前もつしたとおり。持参したもので間に合わせよとのお達しである」

江戸から持ってきた長持ながもちやつづらは、中身を確かめると言っただけでいかれたまま、三年たった今でも返してもらっていない。

男は、貧しい飯ののった膳を義周の側へ押しやると、足音も荒く遠ざかっていった。

義周は目を細めた。閉めそこなつた雨戸の隙間から外の景色が見える。まっ白な雪と藍玉をぶちまけたような空が、さきほどとは違う感慨をもつて迫ってくる。

義父の義央よしひでおは、実際のところは祖父だった。義周の父は上杉家へ養子に出ており、父の弟、つまりは義周の叔父が吉良家を継ぐはずだった。しかし叔父が夭折したため、吉良家は断続の危機にさらされる。そこで今度は、上杉から吉良へ義周が養子に出されたのだ。

そのとき義周は五歳だったので、あまり覚えがない。気がついたら、祖父が義父だった。だから、義周にとっての父は祖父だ。あのほっこりとした福顔が、義周には懐かしい。あの夜、斬りつけられて気を失ったせいで、人からは情弱だと誇られたが、義父の首が飛ぶところを見ずにすんだ。それでよかつたと今はおもう。自分は、だいぶ変わった。世間で言われるとおり、臆病になった。義父はもちろん、義母も、本当の父も、もうこの世にはいないのだから、それでいい。

もう疲れてきた。

いま、たしかに横になっていたはずだ。それなのに、宙にでも浮いているかのように背が軽い。地に着いているという感覚がなかつ

た。口元がほんのりと温かい。酒だろうか。この味は、酒だった気がする。あの晩、数刻後に死ぬとも知らずに、義父は義周に酌をしてくれた。赤くなつた顔をほころばせて、茶の湯の話を一方向的にまくしたてていた。義周には興味のない話だったが、なぜだか嬉しくて、ずっと頷いていた。義父の爪の色は年に似合わぬ薄桃色で、それも義周を幸せにさせた。まぶたに生えた短いまつ毛はまばらだ。そこに紅潮した頬の色が映っている。とても美しいもののような気がしてぼんやりながめていた。家中の者も下男たちも、総出で酒を飲んだ。灯皿にいっぱい油を入れて、いっぱい火を点して。こんな楽しい夜があるとは、義周は知らなかった。明日もまた、こうなるとおもつた。酔つた義父を寢所まで連れていった。床板の上で寝入つた家中の者に布団をかけてやつたも義周だ。空が見たい。今夜は離れて寝よう。酒のあとは静かなのがいい。夜気が冷たい。吐いた息が凍つてしまふそうだ。雪はやんで、星空。明日は十五夜だ。真つ青に光る月の光が赤、白、黄。次次に色をかえて、やがて虹色になつた。天人、天女、飛天、に餓鬼。冥鬼。釈迦に菩薩に明王。あれは盧舎那仏ろしゃなぶつだろうか。みんないっしょくたになつて、盆ござの上で奇妙な踊りをおどっている。義周もおどつた。足元には切腹した赤穂藩の牢人どもが、臍物をぶちまけて真つ赤な唇をにやにやさせている。義周に踏まれるときやつきやと声をたてた。義周も笑う。地の果てまでも並んだ生首が、いっせいに口を開けて歌いだした。歌おう。口を開くのが億劫だ。眠い。酒を飲みすぎたのだろうか。早く離れまでいかなければならない。足元に女体の海。どうせ踏むなら手水の中へ。猫はあつちいけ。朝飯は井戸水でけっこう。おまえらもつと腕。はんぶん解けているのなら歓迎する。竿に雑巾がかかっている。ごろ寝するならげろの上。おれは奈良の大仏を見たことがない。たん壺の中。乞食の頭皮のにおい。鐘。笛。雨戸の隙間から漏れるのはなに。琴と笙。へたくそな音楽。光。はやく行かなければならない。光。光るのはなに。

戸が開いた。

「正月から縁起のわるい」

世話を任されていた二人の藩士は、眉根を寄せながら雨戸を外しにかかった。

「さつさと済んでよかったんじゃないか。いつまでも世話させられるのもたまつたもんじゃない」

吉良左兵衛義周は、戸板にのせられて高島城から出た。二十一歳だった。

絶美（上杉景勝・上杉景虎）

謙信の面容は美しいといえない。狭い肩に顎の張った大きな顔がのっついて、その中央にちんまりと目鼻が配されている。肌は白くすばめたように小さな唇は滑稽なほどに赤い。見れば見るほど珍妙な面体だ。しかし、それが不思議に美しい。撥が弦を弾く。青苧あおぞの小袖に更紗さらの胴着をひっかけた謙信の体は、月影と灯光を片身替に浴びていた。ほとんど抱きかかえるようにして奏でる琵琶の胴は桐火影を映して妖しくぬめっている。

なぜ自分は美しくないのだろう。景勝はおもった。細部こそ違えど、義父である謙信と自分は実によく似ている。もともとが叔父甥の関係であるから、容貌が似ているのは道理だ。だが自分は美しくない。似寄った顔であるにも関わらず、目に見えぬ部分で決定的な違いがある。そのことが、二十歳になったばかりの景勝の心へ暗い影を落としていた。ぬうぼうだの殺ぎ接ぎだのと噂されるのもこたえるが、憧憬する義父との繋がりはずかな血以外にないこと、それが景勝にはなにより悔しかった。

琵琶の音が高くなるにつれ、謙信の目がゆっくりと伏せられる。雪のように白い瞼だった。太い指に握られた撥が、舞うように弦を弾く。軒は灯火を照り返して静かに燃え、空には皓皓こうこうたる望月がかかっている。雲はない。宴席のたれもが、そして夜空までもが、謙信の美に酔っていた。

ああは、なれない。景勝は瞼を伏せる。先ほどの義父の仕種を無意識に真似たのだと気づいて、景勝は己が不快になった。猿真似はこの顔だけで充分だ。張り裂けるような切なさを覚えて景勝は席を立った。宴はたけなわだ。ひとりくらい姿をくramましたとしても問題はないだろう。

景勝は自嘲した。そもそも、たれも自分など気にとめない。

上杉ふぜいが。

越後の酒は美味と言うが、景虎の口にはまったく合わない。冷え冷えと辛く、喉に焼けつくようだ。それでも吞まずにはいられない。朱塗りの杯へ口をつける。地の果てまで連なる山山。泥臭い人人。実家の北条と比べると、越後はあまりにも鄙び、くすんでいた。そんな鈍色に満ちた中でも夜気だけは鋭く、いまだ中秋であるのにはや肌を刺す。

なにもかもが気に入らぬ。柱へよりかかり、目を閉じた。人の気配はずっと遠い。宴席から離れた濡れ縁は、彼岸のごとく静かだ。青光が降り注ぐ。瞼を下ろしていても、月の在り処ははつきりとわかった。夜気が澄みすぎているからだ、景虎はおもった。蝙蝠かわほりを額の上へかざす。痛みを伴う強烈な月気は、扇に漉されて絹のような柔らかさを運び、景虎の心を静めた。水底に似た心地よさに浸る。遠くの人声が不意に途絶えた。うろんにおもって目を開くと、やがて琵琶が鳴り始めた。優美な音。義父の上杉謙信だ。景虎は杯を地へ打ちつけた。跳ねた酒が頬を濡らす。凧いだ心が再びかき乱された。

入道である謙信には子が無い。自然、養子をとることになる。北条からの人質である自分も、そうして謙信の養子となった。そんな景虎へ、謙信は自らの姪を嫁によこした。景虎という、義父自身の名を手授しもした。子としての扱いは、同じく養子で景虎の妻の弟である景勝と、なんら変わらない。それどころか、景勝を差し置いて自分のほうを跡継ぎにしようとしている節すら、謙信にはある。景虎は縁をおりた。実家の北条ですら冷や飯食いであった自分を、そうまでして引き立てる気が知れなかった。あからさまな哀れみは愚弄されているのと変わりがない。

風と琵琶が一体となって夜を蕭蕭とわたっていく。耳を塞ぐ。琵琶の音は執拗に景虎を責めた。冷えた月気が肌を焼く。湿った土が素足に張りつく。指先が凍える。気が狂いそうだ。

たれかがしゃがまっている。景勝は慌てて駆け寄った。濡れ縁の前で地に膝をついた人影は、月光に黒髪を乱し必死のさまで耳を塞いでいる。

「たれかこれへ。たれかおらぬか」

いらえはない。景勝は震える人の肩を抱いた。派手な段模様の小袖に見覚えがある。

「三郎どの。どうされたのじゃ」

義兄景虎の身体は冷えきっていた。うつむけた玉顔が色を無くし、わずかに開いた薄い唇は瘡のごとく震っている。ゆいいつ力のこもった手のひらは、頑なに耳を覆いつづけていた。

景勝は、黄地平絹の胸服を脱して景虎の肩へかけ、背をさすってやった。なお助けを呼ばうと、景虎は弱々しい手つきで押しとどめた。

「すまぬ、喜平次どの」

「わしのことは構わぬ。しかし」

「大事な。悪酔いをしたのであろう」

景虎は弱弱しく顔をあげた。黒いまつ毛に涙がにじんでいる。

「席を離れて正解であった。このように無様な業体を、義父どのの御前ではさらせぬゆえ」

無理な感をもって笑った景虎の顔は、散る百合のようにかそかで、景勝は胸が痛んだ。佳人薄命ということばをふとおもつ。

「喜平次どのには見苦しいところをお見せした」

「いや」

いまだ辛そうな景虎を助け、濡れ縁へ座らせる。虫の音がりとした。大気は澄んでいる。義父の琵琶はまだ続いていた。月の光。すべてが渾然として、うつとりするような夜だ。こんな夜に、景虎はなぜ耳を塞いでいたのか。ただの悪酔いとはおもえなかった。

景虎が、額に張りついた黒髪を払った。白晢には冷や汗が浮いて、露が降りたようになっていいる。酒気が天性の美貌へ華を添え、義兄

の体は匂いたつ花卉のごとく悩ましかった。顰めた眉が切れ長の目へ影を落とす。物憂げな瞳は、胸をえぐるような切なさ^{おっおう}を汪汪と湛えている。

景勝は魅了された。みなが折に触れ景虎の美貌を讃える。その訳が、実感をもつて景勝の胸を突いた。たれもが景虎を愛している。義父すらも。こうは、なれない。

曖昧に笑んで、景勝はふたたび景虎の背をさすった。へつらいである自分自身わかっていたが、引き攣った心は元には戻らなかつた。うわついたことばが口をついてでる。

「よい、月夜であるな」

似合わぬことを口走ったのは、なぜか。

よい夜だと。景虎は吐き気がした。越後にきてこの方、なにかを美しいとおもったことは一度もなかつた。いや。生まれてから時なく、息がつまるばかりで安らぎなどない。瓶の底へ押し込められたような生き方だった。

義弟は、大きく張り出した顎を上へ向け月を仰いでいる。垂らした髻が風に煽られ太い首へ巻きついていていた。紺染めの小袖から饅えた汗のにおいがする。窪んだ小さな目は清水のごとく澄んで、その底に月が白く映っていた。なんの気苦労も知らぬふうだ。唾を吐きかけてやりたくなる。

肩にかかった景勝の胴着を掻いこみ、景虎は縁から腰を上げた。

「どこへ」

「月があまりに明るいのでな。わしのような日陰者は、誘われずにおれぬ」

皮肉を込めたつもりだったが、景勝は安心したようにほっこりと微笑んだ。

「気分がよくなられたのなら結構じゃ。わしもともに参ろう」

無骨な景勝には珍しく、えらく饒舌だ。その余裕ぶったさまが、また景虎の癪に障った。

庭を抜け、垣ぎわの楓の前へ出た。赤く色づきはじめて葉が夜の中でひととき黒い。虚無のような漆黒に目眩を覚えて、景虎は目を伏せた。自らの鼻先が、闇にぼくと白く浮かんで見える。

視線。景勝がこちらを見ている。

「おれが気になるのか」

ぞんざいに吐き捨てると、景勝は目を丸くした。まっすぐに見据え、鼻で笑ってやった。

「おれの顔ばかり見おって。きさまの出来ない面の足しにでもなるとおもったか、景勝」

罵られたことなど生来ないのである。驚きに見開かれた景勝の目に、景虎の腸は煮えた。気づけば腕を突き出していた。

「馬鹿にしおって」

突き倒された景勝は、背中から楓の幹へ打ち当たった。色味に乏しい唇が苦しげに歪む。脚が出た。つま先が景勝の脾腹へめり込む。景勝は反吐を吐いた。丸まった背へ踵を打ち下ろす。遠くで鳴る義父の琵琶が、耳の奥で木霊した。

景虎を前に、自分が勝っていることなどひとつもない。美貌への憧憬。義父の愛を一身に受けていることへの羨慕。それが義兄へ抱く感情のすべてだった。

景虎の赤い唇から、醜悪な雑言が止め処もなく吐かれる。優美な手足がしなり、容赦のない打擲を景勝へ加える。景虎の美しい瞼は裂けんばかりに吊りあがっていた。悪鬼そのものだ。それでいて今にも泣き出しそうに儂い。なぜこんな顔をしているのか景勝にはわからなかった。あばらの砕ける音がした。痛い。猛り狂う義兄が恐ろしく、切なく、そして悲しく見えた。

「きさま」

髻を掴まれ引き起こされた。景虎の荒げた息が鼻先へかかる。酒のおおいに混じって獣のような悪臭がした。おのれの鼻血だった。「笑っておるのか」

「笑つてなど」

声を搾ると鼻腔から喉へ血が逆流した。鉄錆に似た苦味が走る。
「たれもおれを笑つておるう」

唇が触れるほどの距離だ。景虎の眼球はざらざらと光つて、望月をそのまま宿しているかのようだった。きつい酒の香。

「三郎どのは、酔つておるのじゃ」

「酔つておるわ」

ついに景虎は笑いだした。怪鳥のごときけたたましい声を響かせる。それがにわかには止んだかとおもつと、唾が景勝の鼻へ吐きつけられた。

「四六時中酔つておる。世がみな酔つておるのに、おれだけが正気でいられるか。泥のように濁るまで呑みつくしてくれるわ」

景虎は乱暴に楓を一枝折りとつた。鋭い枝先を景勝の喉首へ突きつける。

「突き殺してやるうか、景勝」

景勝の背を冷たい汗が伝つた。景虎の脛が細められる。黒いまつげに覆われた目は油にまみれたようにぎらついていた。虫の声。刺される。

琵琶の音が止んだ。景虎がいつしゅん動きを止めたのを認め、景勝は彼を突き飛ばした。黄地の胴服が闇にひるがえる。揉まれるようにして、景虎は地面へ打ち倒れた。痛む体を叱咤し景勝は楓の陰へ這い逃れる。喉から漏れる息がひゅうひゅういった。

琵琶。全身をのせる。景勝を打ちすえた指が軋むように痛んだ。

その痛みがより激しく撥を打たせる。弦が震えると体も震えた。殴つた頬の感触。蹴つた腹の弾力。血のぬめりまでもがおもいだされて、景虎の頭は雷霆に打たれたがごとくしびれた。

「三郎。見事なり」

自分でも知らぬ間に奏し終えていたらしい。謙信の満足げな顔が、景虎をうつつへと引き戻した。

「今宵の音、まさに絶美なり」

あの場からどのようにして戻ってきたのか記憶にない。いつ琵琶を手にとったのかも定かでない。苦しげな景勝の姿だけが、膠にかわで貼りつけたように、脳裏へへばっていた。

「恐悦至極に存じまする」

口先がなめらかに動くことに戸惑いながら、景虎は琵琶を抱くようにして頭を下げた。これが見事とは笑止な。自然、口元が歪んだ。景虎が微笑んだとおもったのだろう。まわりの者もみな笑んだ。指が痛む。再び景虎は撥をとった。

景虎が弾いているのだとすぐにわかった。さきほど自分を打ち据えたときと同じだ。音色は熱く冷たく揺れ、痛いほどに悲しい。そして美しかった。

景勝は楓の幹へ縋り、這うようにして立ち上がった。梢を見上げる。そこには、月。

弦を弾く。景勝は震えながら聴いている。想像ではなく確信だった。景虎の脛には、景勝の髪の一すじまでもが、ありありと浮かんでいる。あの唇が苦悶の声をあげているとおもつと、景虎の体も震えた。

軒端を見上げる。そこには、月。

月が美しい。景勝はおもった。

月が美しい。景虎はおもった。

兄弟（袁紹）

庶子だの劣り腹だのと口汚く罵られても、もはや腹の立つこともない。才知も風格も人望も、兄である自分のほうがずっと上だ。そんなことは、とうの昔から分かりきっていた。

「おにいさま哥哥」

舌足らずな声がした。

振り向くと、往来の石畳の上に、袁術の愛らしい姿があった。額が狭く、目は大きい。産毛の多い頬はうっとりするような桃色だ。少しだけ猿に似ているところが、たまらなくかわいい。巾で包んだ団子髪をふりふり駆けよってくる。たまらず、袁紹は目を細めた。

「愛しの弟ぎみの登場だな」

曹操が、頬のだらしなく緩んだ袁紹を^や揶揄した。おもわず拳を振り上げたが、袁術がすぐそばまで来たので、袁紹は渋渋ひっこめた。小さな口から乱れた息の漏れるままに、袁術は律儀に礼をしてみせる。

「こんにちは、孟徳さま」

たどたどしく頭を下げたのに合わせて、青い着物がするりとまくれる。細い足首が見えた。乱れた裾をあわてて正してやりながら、袁紹は苦虫をかんだ。

「術。こいつに頭を下げる必要などない」
「ですが」

袁術は困ったように眉尻を下げた。こうすると、大きな目は潤んでいまにもこぼれ落ちそうに見える。

「孟徳さまは哥哥のご友人でしょう。哥哥の大切な方は、術にとっても大切です。そうですね、孟徳さま」

同意を求められた曹操は、白い顎を指で挟み、苦笑した。半分は

楽しげで、もう半分は呆れたような顔をしている。袁紹はさらに不機嫌になった。

「友などではない。このような輩を、世では悪党と言うのだ」

袁術の幼い首が傾げられた。曹操はぷつと吹き出して、袁術の肩を軽く叩く。意地悪く細めた目を袁紹へ向けた。

「本初の弟ぎみはかわいいな。うちへ連れて帰りたいくらいだ」

「馬鹿を言うな」

袁紹は唾を飛ばして、弟の肩へ乗せられた曹操の手を払いのけた。袁紹の、狭い額から滑らかな顎までが、真っ赤に染まる。意識はしていないが、こんなときの顔は猿に似ている。やはり兄弟だ。

「術、わたしを呼びに来たのだろう。行くぞ」

「でも、孟徳さまが」

「やつにかまうな」

袁紹は小さな手をとって、大股で歩きだした。大笑いする曹操の声が、その背中へ反響する。

「あの、哥哥。孟徳さまを置いてきてしまったのですか」

裏路地にはいったところで、袁術は困ったように尋ねた。立ち止まった袁紹は、袁術の細い両肩へ手をおいて、口元を厳しく引き締めめた。

「かまわん。いいか術。街中は危ない。わたしを探すなら、家人に言いつける。これからは曹操のような不良にかまってはならんぞ」
「不良、ですか」

薄い眉を八の字にして、袁術は首を傾げた。

「哥哥はいつも孟徳さまといっしょにいらっしゃるのに。哥哥も不良、なのですか」

いっしゅん険しく眉宇をよせてから、袁紹は諭し顔になった。

「やつとわたしたちとは生まれが違う。曹操は生まれつき卑しい男だが、われらは由緒ただしい名家に生まれた。だから、同じことをしていても違うのだ」

袁術は意味が飲み込めないらしく、小さな口をぽかんとさせてい

る。その口元を軽く指でなでてから、袁紹はしなやかな腕を伸ばし、袁術を肩へ抱えあげた。

「いずれわかる。おまえは、わたしの弟なのだからな」

きや、と言つて、袁術は袁紹の髪へ指を絡めた。端然とまとめられた髪はほつれて、幾筋かが肩へ落ちる。その青絹の衣には、絢爛たる錦糸の刺繍が施されていた。袁術のものも同じだ。揃いの着物は、風を孕んで翩翩とひるがえる。きらきらと輝いた。笑い声。

袁紹は頭を振った。

昔のことなのだ。今の袁術は、兄である自分を差し置くばかりか、皇帝を僭称し、諸侯から失笑をかっている。愚かな男だ。一族の恥だ。醜く皺が寄つて、見るに耐えない。だから。だから。忘れる。

袁紹はもう一度、頭を揺すった。

霜白（子貢）

「子がなぜきみを軽んずるような態度をとるのか、おれには理解ができない」

激しい光を帯びた巨大なまなこを、子路は真つすぐに据えた。

「辛い放浪の日日を支えたのは、子貢、きみだ。きみが、稼いだ金銭を惜しみなく提供してくれたからこそ、おれたちは客死することなく旅を遂げることができた。そればかりではない。この私塾にしても、きみが金を集めなかったとしたら、開くことは到底かなわなかっただろう。きみの財産があったからこそ、子は安住の地を得、後生の弟子たちは子の教えを受ける場を得ることができた。おれは、きみを評価する。きみは、繹繹と千載にわたって続くであろう、この孔門の礎を築いたのだ」

長口上を切りあげた子路の口髭は、荒い鼻息になぶられたせいで、細かな水滴がびっしりとまつわっている。

霜にも似たその白さに、子貢は伏せ目がちにほほえんだ。卓の縁を撫でる。冬日に乾いた木目は、ささくれて白い。東屋の軒端に見る空が、霜で満ちはじめている。

「子路にいさんが、お金の話をなさるだなんて」

昔の癖で、揶揄するように子貢は言った。

子路も昔の子路ではない。血の気の多いところは相変わらずだが、いまは、落ち着いた口ぶりで鷹揚にうなずいた。

「人として生きる以上、逃れられぬことだ。たとえ子であったとしても」

ふたたび子路の口から出た「子」のことばに、子貢は目を細めた。上まぶたに植わったまつげが冬日を受けて、視界を白く滲ませる。

子路本人が意識しているかはわからないが、子を非難するときであつても、彼の基準はあくまでも子だ。子の立場にたつて、子を非

難する。こつした奇妙な矛盾を、ごくあたりまえにやってのけるのが、子路の常だった。なにしろ、この兄弟子は子が慕わしくてたまらないのだ。好きで、恋しくて、いとおしくて、たまらない。だれよりも正しく、つよく、子を理解したい。子の言動に違和をおぼえた際に激しく反発するのは、そういった心からのことだろう。

子貢はおもつ。自分も同じだ。かたちは違えど、同じように子に恋焦がれている。それなのに、子路は子に愛され、自分はそうでもない。子に愛される子路の純粹な心根が、子貢はうらやましかった。自己の性根が子に好かれぬことはあきらめているし、今さら嘆いたところで詮ないことだと、わかっている。ただ、わかりきったことが折に触れて痛みだすことには、まだ慣れずにいた。

子貢はもういちど卓の木目をなぞってから、銚子を手を取った。子路の杯へ酒を注ぐ。さざ波のたった酒のおもてが、傾きかけた陽を、砕けた白磁のように千千と映した。息が白い。きっと今夜も冷える。

「そうおっしゃるにいさんも、子は金銭に距離をおいていらっしやるのがいい、とおもわれるでしょう。やはり銭勘定は、ぼくが引き受けるべきなんです」

子路は、酒には手をつけず、眉を険しくつり上げた。

「きみにまかせておけば万事安心だということはわかっている。ただ、おれが我慢ならないのは、きみが卑しい仕事をするもののように扱われることだ。金銭は手段であって目的ではないが、持たずに生きてはいけぬ。清貧といっても、そのせいで体を壊しては意味がない」

子路は、暗に子淵しえんのことを言っているらしかった。子貢よりひとつ年嵩の子淵は、貧しすぎるゆえか、三十にしてすでに総白髪だ。痩せかたもすさまじい。命が危ういほどの貧窮のなか、立派に学問をし、あまつさえ生活を楽しんでさえいる彼を、子は孔門第一の賢者と評価している。

一方の子路には、敬愛する子のことばであつても、疑問とみれば

つかかかっていく実直さがある。粗野で乱暴な面はあるものの、そういう部分をこそ子路の魅力として、子は微笑ましくおもっているようだった。

子貢には、子淵ほどの慎ましさもなければ、子路のような愛嬌もない。口ばかりが達者でつい出しゃばってしまっし、直截にものを言えず、へんに利口ぶった言い回しをしてしまう。

たとえば以前、月はじめの儀式に供する羊を廃止しようと、子貢は子へ進言したことがあった。まいつき羊を屠るのは無駄だとおもえたし、経済的な余裕もなかった。

あのときの、子の目。

「子貢や。おまえは根っからの商売人だね。おまえは羊を惜しいと言うが、わしは祭礼が衰えることのほうを惜しむよ」

おもえばあのと時から、子とのあいだに、隔たりに似た冷たいものを覚えるようになったのかもしれない。

「なんにしる、銭金など俗な仕事に違いありませんから」

子貢は、着込んだ皮衣の襟を、ことさらに撫でて見せた。いつも襷褌をまとっている子路への、あてつけのつもりだった。しかし子路は目くじらたてず、むしろ子貢を庇うかのようにことばを激しくした。

「俗などということはない」

「子路にいさんは、どうしてそこまでぼくに目をかけてくださるのですか。ぼくは、よくにいさんをからかい、あげつらっては、得意になっているのに」

「昔のことだ」

「いいえ。いまだって」

「きみは、さつきから話を逸らしてばかりいる」

子路の肌へ走った浅深の皺が、にわか紅を帯びる。怒気を含んだ子路の顔は若いころの彼そのまま、ふたたび子貢の昔日を揺すぶった。

「子貢よ」

御者台の子貢は、手綱をおろそかにしないよう注意をしながら、首を後ろへひねった。座席に腰を下ろした孔子が、朝日の下におだやかな笑みを湛えている。

「おまえは、君子かね」

縦皺のよった孔子のくちびるから、白い湯気がさかんに立ちのぼっている。眼前も一面に靄でけぶって、視界がはつきりしない。霜を砕く車輪の音だけが、湛湛と荒野をわたっていく。

「そうありたいと願っています」

子淵にはかなわないとしても、子路には勝っていると、子貢は自負していた。二十以上も年上ではあるが、子路は細緻に欠けるうえ粗暴であり、そう賢くもない。子の護衛くらいしか果たせぬ彼に比べ、孔門において弁舌第一と言われる自分は、格段に評価されて当然だった。

「老師。ぼくは君子ですか」

白い息を弾ませながら、子貢は尋ねた。

笑みを深くした孔子の面は、柑子に似て芳しい。

「さしずめ、器であろうかの」

指先をつと差しあげ、孔子は祭器らしき形を中空へ描いてみせた。「器ですか」

子貢が怪訝な表情を露わにすると、孔子は真面目な顔で、子貢へうなずきかけた。

「宗廟に黍と粟を供えるじやろう。その器じゃよ」

「ぼくが、器」

漏らした息は、なにかを形づくることなく消えた。

「子は、ぼくがかたちだけの人間であると、ちゃんと見抜いていらつしゃるんです」

「そのようなことはない。きみは、自分を卑下しすぎる」

子路が身を乗り出すと、東屋の真ん中へ据えた卓は大きく傾いだ。酒がこぼれて、卓の縁へかかった子路の手を濡らす。大きな手は、彼の顔とおなじで皺が多かった。ことに、親指の付け根に走った一

本は、濃くはつきりとしている。子路の生きざまのようだった。

「凡夫にすぎないぼくへ、子はいつだって、正しいありようを示してください。けれども、ぼくは応えることができないんです。どんなに素直になろうとしても、ぼくの中のなにかが捻じ曲がっていて、おもつ方向へ行くことができない。ぼくだって、子淵に皆さんや子路に皆さんのように、正しい道を歩いていきたい。それはきっと、子の行かれる道でもあるんですから。でも、どうしても、そっちへ行くことができないんです。ひねくれているんです。子の行かれる道に徳があるとすれば、反対の道を行くぼくに、徳はありません。ぼくは、落ちこぼれです。欲に目の眩んだ小人こじんです。卑しい商人です」

「きみが小人などと、なぜ言うのだ。現に、きみは」
子貢は首を振って、子路のことばを制した。西へ傾いた陽が、庭を褪せた色に染めはじめている。

「わかっているんです。ぼくは、器の中身にはなれない。ただからっぽなだけの器です。それでも、ここにいたいんです。器でもかまわない。そんなぼくができることといたら、子に生活の不自由をさせないでおくことぐらいです。わかっています」

子貢は自分へ言い聞かせるように一気にことばをつむいだ。こんなことをしなければ揺らいでしまいそうな自分に、眼窩の奥が鈍く痛んだ。卓を元の位置へ引き寄せる。杯へ酒を注ぎなおした。子貢はわらった。

「すみません、にいさん」

子路の顔が、遠く、ゆがんで見えた。

思子（姫急・寿）

夕日のべつたりと垂れた黄河は粘りつくような赤だ。

「死にますか」

「死ぬ」

舟はみなもをいく。流紋をきつて、いく。

死ぬとわかつて見る落日はどんなだろうと、寿はおもった。

「あにうえ」

力をこめて呼ぶと、急は河面へ落としていた目をあげた。目玉も頬も黒髪も西日でべつとりと染まって、今にも焼け落ちてしまいうだ。目元の皺だけが暗く深い溝を刻んでいる。

寿は兄がわからない。

実父に花嫁を奪われた男というのは、いったいどういうところ持ちでいるのか。横取られたその女に殺されるのは、どんな気がする。その女の産んだ子に、こうして案じられていることは。

「おれは、忠孝の士でありたい」

急が、額にかかった髪を払った。風はない。乾かぬ汗が肌へ沼のように広がっている。

父子ほど年の離れた兄の肌は、年に似合わず密に肌理が寄っていた。寿がいままでに触れたどんな絹よりもすべらかだ。触れてみたいが、いまさらどんな顔をして触れればいい。

「それは死よりも重いことなのですか」

「なにごとにもかえられはしない」

「あにうえは、充分に忠義をつくしてらっしゃる」

両眉の険しく迫った眉間を揉みつつ寿は兄を盗み見る。髻のほつれた急の横顔は、ひどくみすばらしいにも関わらず、汗に濡れた肌と強い瞳が爛爛と斜陽にひかって、恐ろしいほどの気色を湛えている。

「ここで逃げたとて、世のたれもあにうえを不忠者だなどとはおもいません」

「父上のおことは絶対だ」

「母上は、ぼくに父上のあとを継がせるために半狂乱になっています。父上もその気である。要はあにうえ、あなたが」

「知っている。おれは邪魔者だ。父上は、おれを捨てた。それでもおれは父上に背くことはできない」

苦いもののひとつも浮かべない兄のくちびるがもどかしい。肉の薄いそれが落日にまつ赤に染まっているのを横目にしながら寿は祈った。

「逃げてください。母上は、あにうえを殺すつもりです。それも、とてもむごい手段で」

死に怯えてくれればいい。亡命してくればいい。新たな天地で、自分と二人やり直せればいい。

寿は眉間を強く揉んだ。泥で濁った河水は静かで、舟底を叩くこととはない。舟の上は地上であるのとまるで変わらなかった。それが寿には不気味にかんぜられる。

櫓の音。船頭の背。夕日が赤い。目の奥まで染まってしまいそうだ。

「あにうえ。ぼくと」

「おれは、父上に命ぜられたとおりこの先へ行く。義母上がどんなつもりでおられようと構わぬ」

自分が妻にするはずだった女を母と呼ぶころはどんなだ。寿はふたたびおもって、眉間を揉む指を強くした。

兄はなにもかもを受け入れてしまふ。父の淫乱も、母の権欲も、そして憎むべき弟の存在も。諦めに似たその境地へ達したとき、彼の天命は尽きた。

残酷すぎる。善良であるぶんだけ早く果てねばならぬ命など、がえんぜたくはない。

寿は眉間から指を離した。ほとんどずがるようにして兄を見た。

「饞別の宴をはらせてもらえますか。今宵」

指が震える。おのがこころにたったいま浮かんだ思惑は、悩む間もなく決意へと変じた。なんとしても、兄を生きながらえさせてみせる。

「ありがたく受けよう」

はじめての笑みが急のおもてへうつすらと浮かべられた。その目元口元に走る皺へ、吸い込まれてしまいそうに夕日がさしている。寿はじつと見た。ただ、じつと。

「どうして」

血だまりの中、指が白い。

「どうしてだ」

昨夜まで生き生きと血の通っていたものだとはおもえない。あんなに美しい血色で、杯を握っていた。薄色の指が瓶子をとった。酒を酌んだ。

「どうして」

太い腕もまっ白に血が抜けて、折れ砕けた旗飾りの牛毛が赤く染まっている。白いはずの毛束が赤く。腕は白く。なにもかもがちぐはぐだ。この旗を車上に掲げていくのは自分であつたはずだし、血だまりへ身を沈めるべきもとうぜん自分だった。どうしてこうなつた。

眠りから覚めると寿がいなかった。身の証である旗もなくなつていた。黄土に穿たれた轍を追ってみれば、ただ血だまりがあつた。寿は、死んでいる。

身がわり。

見るかすかなたに土埃が白い。逃げ散つた従者だろうか。それとも、寿を手にかけて奴ら。耳をすませば馬蹄の響きがかすかに聞こえる。来た道を叫喚の体で引き返していくのは急自身の従者だ。なにもおもわない。見捨てられてるのには慣れてる。

急は、伏し倒れた弟の首に触れる。指先とは違い、いまだ脈をう

っているかのように生々しい色を残している。地と腹の間へ手を差しいれ仰臥させてやる。見開かれた眼を閉じさせるのには難儀したが、いくどか撫でるうちに穏やかな顔になった。年不相応に髭の巻いた顔には皺ひとつない。弟は若いのだと改めておもった。

そう仲のよいでもない異母兄のために、死ぬことができるものなのだろうか。わからない。弟のころになにがあつたのかわからない。寿は死んでいる。

「どうして」

急は寿の指先に触れた。白い肌には赤が斑にまつわって、まだ少しだけ温かかった。それもきつと、すぐに消える。

ああ。

急はため息をついた。生きていてもしようのない気がする。弟が死をもつて長らえさせた命であるにも関わらず、それが自分のものとはおもえなくなっていた。絶望するでもなく愕然とするでもなく、ただ魂魄がはらはらと剥がれていく。弟は、自分と手を取りあつて亡命するつもりでいた。いまからいっしょにいったとて、どんな違いがあるだろう。

初めて握る寿の手だった。急よりもずっと大きく、肌がなめし革のように厚い。横長に潰れた爪が貝殻に似ている。こんな手をしていることを、もっと早くに知ればよかった。見捨てられてなどないことに、どうして気づかなかつた。

「おれが急だ」

叫んだ。

「これは弟だ。殺されるべきはおれだ。殺せ。おれを殺せ」

逃げた従者の足跡が残っている。夜明けの強烈な光の中ではそれも血のように見えた。

「おれが急だ」

急は、寿の手をきつく握った。朝日が照って、血が赤い。赤。

墨梅（王冕）

庭池で硯を洗っていた王冕は、腰をぐいと起こした。年とともに曲がりがちとなった腰が音をたてて伸びる痛みは、苦しくもあり、また爽快でもある。

流した墨を吸ったがごとく、池畔の梅花の白はややくすんでいる。ちろりちろりと散る花弁に見入っていた冕は、堂にたれやら佇んでいることに気がついた。

「これ」

下男を呼びつける。

「わしは、たれぞと会う約束があったか」

「いいえ」

下男はちらと堂を振り向き、ふたたび視線を戻した。

「あちらのお客様が、先生にお会いになりたいとおっしゃりましてお断りしたのですが、どうしても」

「ふむ」

「やはり、お帰りになってもらいましょうか」

「いや」

梅花と同じ色にくすんだあご髭を指先でしごき、冕はいたずらな笑みを眼にたたえた。

「どこのたれかは知らぬが、いくらでも待たせておけばよい」

冕はふたたび屈み、墨で汚れた指を池の水へ浸した。

「ずいぶんとお待たせしまして」

「いえ」

立て並べた屏風絵に見入っていた男は、ふいと体を返した。

「こちらは、みな先生がお描きになったのでしょ」

「しがない年寄りには、たずきといえはこれくらいしかありませんでな」

「ご謙遜を。ご立派なものです」

冕が勧めた席へ男は腰を下ろした。向かい合って座る。

男はすいぶんと若い。三十そこそこといったところだろう。ぬめるような黒みを帯びた目玉が爛爛と冕を射る。ぶしつけに強い眼光は悪悪しくすらあるが、どこか愛嬌じみたものもはらんでい、夢中へ放りだされたような怪しい心地を冕は覚えた。

「して、どちらさまですか」

冕は盆から湯呑みをとった。池の水に冷えた指先に、熱せられた磁器の肌が心地よい。

男は答えず、冕の後を追うように盆へ手を伸ばした。

「意想外です。先生が、このように穏やかな方だとは」

男の指は湯呑みへ触れず、盆の縁をものありげになぞった。その唇から詩歌が滑りでる。

「昨夜 東風 羯鼓鳴り」

冕は顔を上げた。

遠い昔、冕みずからが賦した詩だった。

「髑髏 起ちて作す 搖頭の舞。この勇ましい詩と、いまわたしの目の前にある穏やかな先生と。どちらが、本当の先生なのですか」
捨てたはずの己が激情をふいに突きつけられるのは、晴天の日とつぜんに脳天を打つ雷に似ている。

蒙古族に奪われた中原を、漢民族が挽回する日が必ずくると、若い自分は信じていた。しかし、冕がこうして世を捨て老いさらばえた今も、中原は蒙古の元王朝に侵されたままだ。

痛みなど感ぜぬふうな顔で茶を含み、冕は湯気を吐いた。

「はて。たれの詩でしたかな」

「まさか、お忘れにはならないでしょう」

男も湯呑みの縁へ口をつけた。堂へ吹き込む春風が、男の袖を揺らしている。

黒い瞳が冕を射る。おもわず目を逸らした先に、さきほど描きあげたばかりの梅の屏風があった。

男が湯呑みを置いた。

「これを」

救われた心地がし冕が顔を上げると、男はその画を指さしていた。

「ひとつ、いただきましょう」

「これは、まだ墨が乾いておりませんがな」

「乾かしながら、ゆるりと帰ります」

男は袂から財布をだして卓へ置くと、屏風の縁へ手をかけた。

「立派なものですな。この、枝のさりげなさがいい」

「年寄りの手慰みに、もつたいないほどのお言葉ですな」

「謙遜はよせと言っている」

ふいの激しい言葉だった。

冕と男とは再び睨み合った。

引きちぎれる寸前の絹糸に似た緊迫の中、男が息を吐いた。

「いずれまた、この画に詩を書きつけてもらいに参上します。とび

きり、勇ましい詩を」

踵を返した男の背へかぶせるように、冕は言葉を投げた。

「名を」

振り向いた男の目が、熱情を宿し燃えている。

冕は、忘れかかっていた希望を、はつきりとその瞳に見た。

「名乗っていただかないと、詩を詠むのに不便でしてな。どこのた

れとも知らぬ者のことを詠めるほど、わしは器用ではありませんで」

「これは失礼」

胸の前で手のひらと拳とを合わせ、男は名を告げた。

「朱元璋^{しゅげんしょう}、字を国端と申します。それでは、また。近いうちに」

梅花が散り終えたころ再びやってきた元璋に、冕は臣下の礼を取り、次の詩を贈った。

刺刺たる北風ほくふう 吹いて人を倒す

(激しい北風が人を吹き倒す)

乾坤けんこん 処として 沙塵ならざるは無し

(世界はすべて砂埃に覆われる)

胡兒こじ 凍死す 長城の下

(北方の異民族の若者ですら長城の下で凍死するほどだ)

誰か信ぜん 江南 別に春ありと

(たれが予想したろう。ここ江南に、あらたな春がやってこようとは)

朱元璋が元を打ち倒し明王朝を建てたのは、この九年後のことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4585i/>

たまゆら堂

2010年11月13日23時10分発行